

夢十夜 第一夜 「語り手」と「女」の関係から読み解く

奈良女子大学附属中等教育学校PICASOコース

研究の位置づけ

本研究は、現段階では先行研究に依らず、自分なりの解釈を行うことに主眼を置き、テキストを読み解くことに注力した。

「夢十夜」 概要

語り手が見た夢について語る。「第一夜」では、もう死ぬが、百年後にまた逢いに来るという「女」に告げられるままに再会を待ち続ける「自分」の夢である。「自分」が待ち続け、女に欺れたと思いだしたときに伸びて来た真っ白な百合に接吻し、百合から顔を離す拍子に空を見ると、たった一つ暁の星が瞬き百年が過ぎていたことを自覚する。

作者	夏目漱石
発表形態	新聞連載
初出	『東京朝日新聞』 明治41年7月25日-8月5日
初の単行本	『むら雲』
単行本出版社	日高有倫堂
単行本出版日	明治42年2月5日

この物語がどのような結末であったといえるのか

「語り手」と「女」の関係性から結末を読み解く。

- 「自分」と生きている「女」の関係性
- 「自分」と死んだ「女」の関係性
- 「女」と時間帯と「百合」
- 「自分」と「女」の関係性

夢十夜を読むにあたって

- 荒正人『漱石の暗い部分』より

「フロイトの正統的解釈をゆるすやうにみえる。」と述べているが、本研究では文学作品として読み解くため、漱石の夢分析は解釈に含めない。

第一夜を読むにあたって

本文の1「こんな夢を見た」より、
「自分」が後に語っている物語と分かるが、

その構造は作品中に現れないものであるため、本研究では
⇒「語り手」＝「自分」
として読み解いていく。

参考（須田千里，「第一夜」の構造と主題，漱石研究(8)、1997-5-20)

本文 ℓ 4- ℓ 10 (配布資料1枚目)

- ℓ 3-4 真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、
ℓ 4 到底死にさうには見えない。
- ℓ 4-5 女は静かな声で、もう死にますと判然云った。
ℓ 5 自分も確かに是れは死ぬなと思つた。
ℓ 5 さうかね、もう死ぬのかね、
ℓ 9 自分は透き徹る程深く見える此の黒眼の色沢を
眺めて、是でも死ぬのかと思つた。
ℓ 10 死ぬんぢやなからうね、大丈夫だらうね、

本文 ℓ 4- ℓ 10 (配布資料1枚目)

- ℓ 3-4 真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、
ℓ 4 到底死にさうには見えない。
- ℓ 4-5 女は静かな声で、もう死にますと判然云った。
ℓ 5 自分も確かに是れは死ぬなと思った。
ℓ 5 さうかね、もう死ぬのかね、
ℓ 9 自分は透き徹る程深く見える此の黒眼の色沢を
眺めて、是でも死ぬのかと思った。
ℓ 10 死ぬんぢやなからうね、大丈夫だらうね、

→ 「自分」の現実的な考えと反することを話す「女」の言葉を信じて受け入れる節がある。

本文 ℓ 13-14(配布資料1枚目)

**ℓ 13-14 見えるかいつて、そら、そこに、写っているぢや
ありませんかと、にこりと笑って見せた。**

→ 「女」は親しみを持って何かを教える立場である

本文18-20(配布資料1枚目)

ℓ 17-18 「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。さうして天から落ちてくる星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待つてみて下さい。又逢ひに来ますから」

➡ 「」が出現し、ここから約束が非常に大切なものであった、と読み取れる。

本文18-20(配布資料1枚目)

ℓ 17-18 「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。さうして天から落ちてくる星の破片を墓標に置いて下さい。さうして墓の傍に待つてみて下さい。又逢ひに来ますから」

→ 「女」は現実世界では
当たり前のように持っていないはずのものの使用を要求する。

本文 ℓ 21-25(配布資料 2 枚目)

- ℓ 19 自分は、何時逢ひに来るかねと聞いた。
- ℓ 21 ——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待つてゐられますか」
- ℓ 22 自分は黙つて首肯た。

→ 「女」からの具体的な回答を待たずに首肯している。

本文 ℓ 23-25(配布資料 2 枚目)

- ℓ 23-24 「百年、私の墓の傍に坐つて待つてゐて下さい。
屹度逢ひに来ますから」
- ℓ 25 自分は只待つてゐると答へた。

➡百年という時間をあっさりと受け入れてしまふ

本文 p. 2 - 25 (配布資料 2 枚目)

- ① 非現実的なことを話す「女」の言葉を信じて受け入れる。
- ② 「自分」にとって「女」は「自分」に教える存在である。
- ③ 「」が出現し、約束が非常に大切なものであった。
- ④ 「女」は現実世界では当たり前ではないものを要求する。
- ⑤ 「自分」は「女」からの回答を待たずに首肯している。
- ⑥ 百年という時間をあっさりと受け入れてしまう。

→ 「自分」は「女」に依存していたのではないか

本文 ℓ 27-30(配布資料 3 枚目)

ℓ 27 一一もう死んで居た。

ℓ 28 自分は夫れから庭へ下りて

ℓ 29-30 穴はしばらくして掘れた。女を其のへ入れた。

➔ 「女」の死後、「女」の言葉と復活を全面的に信じていた。

以上より、
「自分」が「女」に依存し、信じていたように
「『女』の復活」を強く信じるようになる。

- ・ 作中の時間帯
- ・ 「自分」の主な行動
- ・ 時間帯と「自分」の行動
- ・ 「女」と「百合」の存在

配布資料4枚目

ℓ 29 月の光が差して

ℓ 31 月の光が差した。

ℓ 37-29 赤いまんまで、のつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて来た。

ℓ 36 赤い日

ℓ 41 赤い日

ℓ 42 赤い日

ℓ 58 暁の星がたつた一つ瞬いてゐた。

配布資料4枚目

- ℓ 29 月の光が差して
- ℓ 31 月の光が差した。
- ℓ 37-29 赤いまんまで、のつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて来た。
- ℓ 36 赤い日
- ℓ 41 赤い日
- ℓ 42 赤い日
- ℓ 58 暁の星がたつた一つ瞬いてゐた。

配布資料4枚目

ℓ 29 月の光が差して

ℓ 31 月の光が差した。

ℓ 37-29 赤いまんまで、のつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。しばらくすると又唐紅の天道がのそりと上つて来た。

ℓ 36 赤い日

ℓ 41 赤い日

ℓ 42 赤い日

ℓ 58 **暁の星**がたつた一つ瞬いてゐた。

配布資料4枚目

ℓ 29-30 穴はしばらくくして掘れた。女を其の中へ入れた。

ℓ 41-42 自分はかう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分からない。勘定してもしつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。

配布資料4枚目

ℓ 29-30 穴はしばらくくして掘れた。女を其の中へ入れた。

ℓ 41-42 自分はかう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分からない。勘定してもしつくせない程赤い日が頭の上を通り越して行つた。

配布資料4-5 枚目

ℓ 43-49 仕舞には、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつて、丁度自分の胸のあたり迄来て留まつた。と思ふと、すらりと、揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けてゐた細長い一輪の蕾が、ふつくらと瓣を開いた真白な百合が鼻の先で骨に徹へる程匂つた。そこへ遙の上から、ほたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらゝと動いた。自分は首を前へ出して、冷たい露の滴る、白い花瓣に接吻した。

配布資料4-5 枚目

ℓ 43-49 仕舞には、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつて、丁度自分の胸のあたり迄来て留まった。と思ふと、すらりと、揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けてゐた細長い一輪の蕾が、ふつくらと瓣を開いた真白な百合が鼻の先で骨に徹へる程匂つた。そこへ遙の上から、ほたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらゝと動いた。自分は首を前へ出して、冷たい露の滴る、白い花瓣に接吻した。

配布資料4-5 枚目

ℓ 43-49 仕舞には、苔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなからうかと思ひ出した。すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなつて、丁度自分の胸のあたり迄来て留まつた。と思ふと、すらりと、揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けてみた細長い一輪の蕾が、ふつくらと瓣を開いた真白な百合が鼻の先で骨に徹へる程匂つた。そこへ遙の上から、ほたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらゝと動いた。自分は首を前へ出して、冷たい露の滴る、白い花瓣に接吻した。

配布資料 5 枚目

- 「自分」が夜を認識していた時
→ 「自分」は「女」を埋めた。
- 「自分」が夜を認識していなかったとき
→ 「女」との約束・復活を信じ続けていた。
- 「自分」が夜（明け方）を認識した時
→ 百合が登場する。

夜明けの時間帯の白百合の正体

- 「女」は夜を認識するために必要な要素の一つである。
 - 「百合」の登場後「自分」が夜を認識するようになる。
 - 百年前「女」を埋めた場所
- ➡ 「自分」にとって「百合」は「女」であった。

【「女」が生きている場面】

- ℓ 6 上から覗き込むようにして
- ℓ 7-8 其の真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんゐる。
- ℓ 9-10 ねんごろに枕の傍へ口を付けて、

→顔を近づけるような動作だけである。

「自分」の行動の表現の一部は幼く感じるものもある。

【「女」が死ぬ場面】

ℓ 25-27 すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱した様に、流れ出したと思つたら、女の眼がぱたりと閉ぢた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んで居た。

→顔を近づけるような動作だけである。

【百合が出てくる場面】

ℓ 47-49 そこへ遥の上から、ほたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふと動いた。自分は首を前へ出して、冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。

→ 「自分」は「百合」に接吻する。

【百合が出てくる場面】

※ ℓ 41-42 勘定しても、勘定しても、しつくせない程赤い
日が頭の上を通り越して行つた。

→百合を「女」と認識していなかったとしても、「接吻」は女
への思いであった、といえる。

【百合が出てくる場面】

ℓ 50 空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いてた。

→ 「女」との関係性の変化の暗示

- ➔ 「女」との関係性が行動から変化したことがわかる
- ➔ 「自分」と「女」の結びつきが「依存」から変化。

ℓ 51 「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

➡ 「女」 (の復活)への依存が無くなった。

「女」との依存的な結びつきから「女」を疑うことによって解放された。それと同時に「女」にはもう会えないということを実感した。

「自分」と「女」の関係性を中心に考察した結果、
「自分」が依存していた「女」から解放される夢
であると読み解いた。

「こんな夢を見た。」と語る時、
死の身近さとそれに対する恐怖、大切な存在を失ってしまうという喪失感を思うのではないだろうか。

- 先行研究への位置づけができるようにさらに解釈を深めたい。
- 「自分」がこの夢を語るときに、どんな思いであったのかについての考察を深めて行きたい。
- 夢の中にいる「自分」とそれを語っている「自分」という時間の乖離に関して考えを深めたい。
- 夢十夜全体を通じた考察を出来るようにしていきたい。